

バイオフィリアリハビリテーションの研究知見を生活につなぐための Web 情報発信の実践 (※)

バイオフィリアリハビリテーション学会
理学療法士 和田里佳

【背景】

リハビリテーション分野では多くの研究知見が蓄積されているが、それらが利用者や家族、デイサービス管理者といった生活の現場で意思決定を行う人々に十分に活用されているとは言い難い。研究成果が専門的な情報として提示されることで、生活場面での判断や支援内容に結びつきにくいという課題がある。バイオフィリアリハビリテーションの視点では、人は環境や意味、主体的な選択と結びつくことで適応や回復が促されるとされており、情報の在り方も生活環境の一要素として捉える必要があると考えられる。私は長年研究に携わり訪問リハやデイケアの現場で実践し利用してきた。その際には利用者や関係者にわかりやすく伝える必要があると考え、リハビリプログラム紹介のホームページを作成した。

【目的】

本発表では、バイオフィリアリハビリテーションの研究知見を、生活や現場判断に結びつけることを目的として構築したホームページ (patareha.com) について、その設計思想と情報発信の実践内容を報告し、今後の可能性と課題を検討する。

【方法】

研究知見を専門職向けの情報として提示するのではなく、高齢者本人やデイサービス管理者や現場職員、家族が主体的に支援内容を検討できるよう、生活文脈を重視した Web コンテンツを作成した。立ち上がり・歩行リハビリに関する理論・研究内容やリハビリ実践経験を基に、機能改善の結果だけでなく、「生活の中で何が変わるのか」「どのような支援の選択肢が考えられるのか」を中心に構成した。見出しは結論を先に示し、専門用語の使用を最小限に抑えることで、判断材料として活用しやすい情報提示を心がけた。

【実践内容】

ホームページ上では、研究背景を踏まえながら、現場でのサービスや支援内容の検討に役立つことを意図した記事コンテンツを掲載している。情報は一方的な指示や結論提示ではなく、読み手が自身の立場や利用者の生活状況に応じて考えることができるよう、選択肢を示す形でタキザワ式リハビリを整理、提示した。

【考察】

一方で、研究知見の簡略化による解釈の幅や、情報発信が実際の行動や意思決定にどのように影響しているかについては、今後の検討課題である。

【結語】

実際の現場での経験や理論・研究知見を生活の言葉へと翻訳し、Web を通じて現場に提示する取り組みは、バイオフィリアリハビリテーションの考え方を社会に広げる一つの実践として位置づけられる可能性があると考えている。